

國學院大學學術情報リポジトリ

江戸期広域出版流通の一形態：
本の取次と薬の取次の関わり：
小特集図書館と書物の世界

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大和, 博幸, Owa, Hiroyuki メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000454

江戸期広域出版流通の一形態

—本の取次と薬の取次の関わり—

大和博幸

はじめに

江戸期最大の本屋と評されている千鐘房須原屋茂兵衛が、家業である本商売の傍ら「順気散／家伝」、「人參長寿丹」などといった薬を商っていた薬屋でもあったことは広く知られている^①。しかし、こうした売薬との兼業商いは、書物問屋である須原屋茂兵衛だけが行っていた特殊な行為という訳ではなかった。書物問屋と地本問屋を兼ねて、多様なジャンルにわたる本を刊行していた江戸の仙(僊) 鶴堂鶴屋喜右衛門も、「靈応丹

／蘭伝」、「龍王調血湯／家秘密方」などといった薬の販売を行っている。また、近世期一番の老舗本屋といわれている京都の松柏堂出雲寺文次郎も、「登龍丸／天下一方」という薬を、また、大坂を代表する本屋の一人であった文金堂河内屋太助も、「江戸の水／おしろいのよくのるかほのくすり」、「金勢丸／秘方」などといった薬を取次いで販売していた。刊行された本の巻末に掲載されている取扱薬の広告文や売薬引札をみると、上記したような有力な大規模本屋たちばかりではなく、三都内で営業する中規模・小規模本屋たちをも含めて、かなりの数にのぼる本屋が薬の兼業販売に従事していたことが知れる。こうし

た兼業本屋たちの中でも、比較的多くの薬を取扱っていたことがわかるのが、江戸の本屋文溪堂丁字屋平兵衛と大坂の本屋群玉堂河内屋茂兵衛である。本稿ではこの両本屋を素材として、彼らが刊行した本や、売弘め（販売）に関わったと確認できる本の中から、巻末に掲載されている薬の広告文や貼付された売薬引札などを抽出し調査することで、本の取次と薬の取次の関わりについて考えてみることを目的とする。

一、丁字屋平兵衛と河内屋茂兵衛の取扱薬

始めに、江戸期に丁字屋平兵衛と河内屋茂兵衛が取扱っていた売薬品を知るために、本の巻末広告及び売薬引札に掲載されていて、取次いでいた事実が確認できた売薬品名を調査し、抽出した調査結果を記してみると、以下ようになる。尚、記載順序について記すと、●の後に記載した事項が取扱っていた売薬品名、（ ）内に記載した事項が売薬品の製造者名、（ ）内に記載した事項が引用した出典書名であるが、奥付の記載で刊年が判明する該当本が複数存在する場合には、最も年代の古い本のみ限定して収録し、それ以外の本については省略した。

丁字屋平兵衛の取扱薬

- あ●「三国一風薬／家伝妙方」〔浅井一寿堂謹製 本家調合所 大坂心齋橋博労町北へ入東側 河内屋重太郎〕（文政二（一八一九）年刊『昔語いばらの露卷之四』巻末広告所収）
- い●「神仙広徳丸／日本一家万病」〔本家調合所 大坂心齋橋博労町北へ入東側 河内屋重太郎〕（文政二（一八一九）年刊『昔語いばらの露卷之四』巻末広告所収）
- う●「神選神明湯／神功皇后御鎧袖薬」〔本家調合所 大坂心齋橋博労町北へ入東側 河内屋重太郎〕（文政二（一八一九）年刊『昔語いばらの露卷之四』巻末広告所収）
- え●「薬王丸／御免」〔薬方根元奥州岩城製〕（文政二（一八一九）年刊『昔語いばらの露卷之四』巻末広告所収）
- お●「五功丸」〔薬方根元奥州岩城製〕（文政五（一八二二）年刊『須弥山図解』巻末広告所収）
- か●「保生丹」〔本家調合所 大坂心齋橋博労町北へ入東側 河内屋重太郎〕（文政五（一八二二）年刊『須弥山図解』巻末広告所収）
- き●「奇応丸／精製」〔製薬 神田明神下同朋町東よこ丁 滝沢氏 弘所 元飯田町中坂下南側よもの向 たき沢氏〕（文政十一（一八二八）年刊『松浦佐用媛石魂録後集巻

- 之七』卷末広告所収)
- く ● 「黒丸子／熊胆」〔製薬 神田明神下同朋町東よこ丁 滝沢氏 弘所 元飯田町中坂下南側よもの向 たき沢氏〕(文政十一(一八二八) 年刊『松浦佐用媛石魂録後集巻之七』卷末広告所収)
- け ● 「神女湯／家伝」〔製薬 神田明神下同朋町東よこ丁 滝沢氏 弘所 元飯田町中坂下南側よもの向 たき沢氏〕(文政十一(一八二八) 年刊『松浦佐用媛石魂録後集巻之七』卷末広告所収)
- こ ● 「婦人つき虫の妙薬」〔製薬 神田明神下同朋町東よこ丁 滝沢氏 弘所 元飯田町中坂下南側よもの向 たき沢氏〕(文政十一(一八二八) 年刊『松浦佐用媛石魂録後集巻之七』卷末広告所収)
- さ ● 「仙女香／美艶／御顔のくすり」〔江戸京橋銀座壺丁目 四ツ角 坂本氏精製〕(天保三(一八三二) 年刊『近世説美少年録第三輯』卷末広告所収)
- し ● 「美玄香／黒油／しらが染くすり」〔江戸京橋銀座壺丁目 四ツ角 坂本氏精製〕(天保三(一八三二) 年刊『近世説美少年録第三輯』卷末広告所収)
- す ● 「神能救命丸／三国無双神伝秘薬」〔本家調合所 大坂心齋橋博労町北へ入東側 河内屋重太郎〕(天保八(一八三七) 年刊『復仇武藏鎧』卷末広告所収)
- せ ● 「万金丹」〔本家調合所 大坂心齋橋博労町北へ入東側 河内屋重太郎〕(天保八(一八三七) 年刊『復仇武藏鎧』卷末広告所収)
- そ ● 「金匱救命丸」〔林氏製 天保十三(一八四二) 年刊『南総里見八犬伝巻之五』卷末広告所収)
- た ● 「玉匱保赤円一名かぞのかんのくすり／小児主薬」〔武州埼玉郡加須町 大和氏門司法橋製〕(弘化二(一八四五) 年刊『丙午明弁』卷末広告所収)
- ち ● 「留飲順胸散／たんしやくりういんのくすり」〔武州埼玉郡加須町 大和氏門司法橋製〕(嘉永六(一八五三) 年刊『庭訓往来絵抄』卷末広告所収)
- つ ● 「神心痢病薬」〔不明〕(元治元(一八六四) 年刊『御家消息往来』卷末広告所収)
- て ● 「小児司命丸／水戸御免日本一家」〔調合所 水戸川和田高倉氏製〕(刊年不明、吉田義昭・及川和哉編著『図説盛岡百年史上巻 江戸時代編 城下町―武士と庶民』郷土文化研究会、一九九二増訂版所収引札)
- と ● 「蘇心丸／清客陸品三先生秘伝方」〔本家調合所 長崎東

筑町 鶴江堂製) (刊年不明『近代世事談』卷末広告)

河内屋茂兵衛の取扱葉

イ ● 「登龍丸／天下一方」(東叡山御用御書物所 江戸下谷御

成道 青雲堂英文蔵製) (天保二(一八三二) 年刊『翁

問答』卷末広告所収)

ロ ● 「玉置保赤円一名かぞのかんのくすり／小児主葉」(武州

埼玉郡加須町 大和氏門司法橋製) (弘化二(一八四五)

年刊『丙午明弁』卷末広告所収)

ハ ● 「葉王丸／御免」(葉方根元奥州岩城製) (嘉永六

(一八五三) 年刊『庭訓往来絵抄』卷末広告所収)

ニ ● 「留飲順胸散／たんしやくくりういんのくすり」(武州埼玉

郡加須町 大和氏門司法橋製) (嘉永六(一八五三) 年

刊『庭訓往来絵抄』卷末広告所収)

ホ ● 「三国一風葉／家伝妙方」(浅井一寿堂謹製 本家調合所

大坂心斎橋博勞町北へ入東側 河内屋重太郎) (刊年不

明『木曾街道続膝栗毛』卷末広告所収)

ヘ ● 「瘡毒一方丸／家伝」(下野栃木町 柏戸良見製) (刊年

不明、鈴木俊幸「須原屋茂兵衛の薬商売―引札と葉書」

『書物学十二』勉誠出版、二〇一八年、所収引札)

ト ● 「蘇心丸／清客陸品三先生秘伝方」(本家調合所 長崎東
筑町 鶴江堂製) (刊年不明『近代世事談』卷末広告)

となり、丁字屋平兵衛が二十種類、河内屋茂兵衛が七種類の薬の取次販売を行っていたこと。そして取扱葉の内、「玉置保赤円一名かぞのかんのくすり／小児主葉」、「留飲順胸散／たんしやくくりういんのくすり」、「葉王丸／御免」、「三国一風葉／家伝妙方」、「蘇心丸／清客陸品三先生秘伝方」五種の売葉取次が重なっていたことがわかる。

二、薬の取次地と取次所

次に、江戸期に丁字屋平兵衛と河内屋茂兵衛の両本屋が、関係を持っていたことが確認できた取次地と取次人名を調査し、地方別・国別・地域別にまとめて表示してみると、以下のようになる。参考のために、当該本の広告に本業が明記されている場合にはそのまま転記し、他の関連資料を調査することによって本を扱っていたことが確認できた場合には、取次人名の前に(本屋)と補記し、調査結果から本屋以外の本業が確認できた場合には、()内に本業を補記した。尚、取次者名の前に何の表示もな

されていない場合は、調査が行き届かず不明ということである。

丁字屋平兵衛

畿内

山城国…①京都…三条柳馬場西江入（本屋） 近江屋治

助、六条魚棚東洞院西入 近江屋庄兵衛、三条通

高倉西へ入（本屋） 大文字屋得五郎、三条通高

倉西エ入 藤屋清右衛門、堺町六角下ル町（本

屋） 吉野屋勘兵衛、室町上立売下ル町 若狭屋

宗助

大和国…①八木・東町 かす屋利兵衛

和泉国…①貝塚・はた町 丸屋宗兵衛、②堺・天神北ノ門

前（本屋） 住吉屋弥三郎、同・大町筋錦町 大

和屋佐兵衛、③佐野・妙あん寺

摂津国…①尼ヶ崎・西本町 とき屋新兵衛、②池田・西光

寺前 はむろ屋甚兵衛、③伊丹・北小路・鹿嶋屋

嘉兵衛、④大坂・心齋橋博労町角（本屋） 河内

屋茂兵衛、江戸堀一丁目 播磨屋弥七、松屋町通

本町角 平野屋甚右衛門、長堀橋南詰 平野屋佐

吉、⑤新在家・志津屋長兵衛、⑥西宮・戎前 大

東海道

平屋甚藏、⑦兵庫・北宮内町 だんごや久兵衛、
同・蛤屋儀兵衛

伊勢国…①桑名・片町 日野屋藤兵衛

尾張国…①名古屋・本町七丁目 書林永楽屋東四郎、同・

本六丁目 桑名屋半左衛門、同・舟入町 中屋久

兵衛

遠江国…①掛川・十王町 三原屋清助

武蔵国…①江戸・小舟町一丁目 大坂屋太助、本郷二丁目

太田屋武兵衛、下谷池ノ端仲丁 書林店岡村（屋）

庄助、室町二丁目 鉄屋八右衛門、日本橋十軒店

（本屋） 播磨屋勝五郎、横山町二丁目 松本屋長

藏、南伝馬町三丁目 書林店三輪里幸藏

下総国…①佐原・橋本（本屋） 正文堂利兵衛

東山道

近江国…①大津・八町御本陣前 清水屋長九郎、②八幡・

宮前 納屋喜兵衛、③彦根・京橋 書林銭屋久治

郎、④日野・大久保町 西村市右衛門

上野国…①桐生・五丁目 石井五右衛門

下野国…①宇都宮・伝馬町（本屋） 井桁屋利右衛門

信濃国…①上田・柳町 芦田屋佐久助

陸前国…仙台・大町三丁目 熊谷屋善兵衛

北陸道

越前国…①三国湊・札ノ辻 角屋佐治兵衛

越後国…①柏崎・嶋町 書林泉屋七兵衛

山陰道

因幡国…①鳥取・二かひ町四丁目 この屋勝藏

伯耆国…①米子・(本屋) 佐々木屋平八

山陽道

備前国…①岡山・川越町 油屋善右衛門

備後国…①尾道・十四日町 平賀屋東四郎、②三原・西町

鈴屋宗兵衛

安芸国…①広島・はりまや町 (本屋) 柏原屋平七

長門国…①下の関・あふら町 銅屋仁兵衛

南海道

紀伊国…①若山・本町三丁目 池田屋新吉、同・中之嶋

(本屋) 坂本屋喜一郎

淡路国…①須本・かちや町 (本屋) 桑嶋屋文蔵

阿波国…①撫養才田村・岡屋兵三郎

土佐国…①高知・たねさき町 山城屋喜兵衛

西海道

肥前国…①長崎・東中之町 (本屋) 辰巳屋万兵衛

河内屋茂兵衛

畿内

山城国…①三条通り堺町 (本屋) 松柏堂出雲寺文次郎、

堺町六角下ル町 (本屋) 吉野屋勘兵衛

摂津国…①大坂…北久宝寺町難波橋東へ入 和泉屋作兵

衛、日本ばし南詰東へ入 (本屋) 井筒屋治兵衛、

南本町難波橋西へ入 扇屋五郎兵衛、南久宝寺町

壱丁目筋北へ入 (本屋) 河内屋喜兵衛、心齋橋

筋本町南へ入 (本屋) 河内屋新助、善町安堂寺

町北へ入 菊屋武右衛門、天満うら門橋西詰西へ

入 五箇屋万吉、堂島わたなべ橋北詰北入 境屋

治三良、堺筋清水町南へ入 (本屋) 正本屋利助、

南革屋町 炭屋治兵衛、西横堀備後町北へ入 富

田屋平兵衛、八軒家船乗場 中嶋屋藤助、嶋之内

丸大向イ (本屋) 長門屋兵助、堀江下わたし場

東へ入 能登屋佐助、天満十丁目鳥居筋北へ入

奈良屋安治良、なんば新地又相生町半鐘之下 播

東海道

- 磨屋喜六、嶋之内三津寺筋わたや町北へ入 播磨屋吉右衛門、江戸堀一丁目 播磨屋弥七、松屋町通本町角 平野屋甚右衛門、日本ばし南五丁目 広嶋屋伊兵衛、平野町御堂筋南へ入藤屋佐兵衛、高麗橋老丁目 (本屋) 藤屋善七、農人橋老丁目 (本屋) 本屋吉兵衛、高麗ばし心齋橋筋角 松本屋清兵衛、新町通筋道若狭町西へ入 (本屋) 松屋喜兵衛、松や町通大手筋北へ入 山城屋卯兵衛、松や町通南久宝寺町北へ入 (本屋) 大和屋嘉兵衛、松屋町二ツ井戸南へ入 (紙屋) 大和屋治兵衛、北はり江市のかハ (本屋) わたや喜兵衛
- 伊勢国…①桑名・片町 日野屋藤兵衛、②松坂・市場 (本屋) 道具屋重蔵
- 尾張国…①名古屋・本町 (本屋) 永楽屋東四郎、同・舟入町 中屋久兵衛
- 三河国…①吉田・伝馬町 (本屋) 江戸屋五兵衛
- 遠江国…①掛川・十王町 三原屋清助、②中泉・(本屋) 溜屋惣 (左右) 助、③浜松・連尺町 (本屋) 伊勢屋太右衛門
- 駿河国…①駿府・新通 (本屋) 藤田屋藤右衛門、同・呉服町 久喜屋勝次郎
- 甲斐国…①府中・(本屋) 井筒屋豊兵衛、同・魚丁 (本屋) 村田屋幸太郎
- 相模国…①厚木・(本屋) 高部屋重八、②伊勢原・(本屋) 塚屋万兵衛
- 武蔵国…①江戸・横山町三丁目 (書林) 和泉屋金石衛門、芝口八幡前 (本屋) 和泉屋半兵衛、小舟町一丁目 大坂屋太助、本郷二丁目 太田屋武兵衛、新橋竹川町 (本屋) 岡田屋伝兵衛、麴町四丁目 (本屋) 角丸屋甚助、日本橋四日市 (本屋) 上総屋惣兵衛、浅草並木町 (本屋) 雁金屋治兵衛、小石川伝通院前 (本屋) 雁金屋清吉、本所一つ目橋きハ (本屋) 河内屋弥兵衛、室町二丁目 鉄屋八右衛門、日本橋二丁目角 (本屋) 小林新兵衛、四谷伝馬町 (本屋) 住吉屋政五郎、本郷老丁目 (小道具屋) 大黒屋庄兵衛、浅草御蔵前八幡前 (本屋) 田中喜三郎、浅草御蔵前八幡前 (本屋) 田中長蔵、下谷広徳寺前通り (本屋) 英幸吉、横山町二丁目 松本屋長蔵、本石町十軒

店 (本屋) 万笈堂英大助、牛込改代町 (本屋)

松屋彦八、芝田町四丁目 (待合茶屋) 水原屋清

兵衛、四谷伝馬町新壱丁目 (本屋) 大和屋長兵

衛、芝飯倉五丁目 (本屋) 万屋忠藏、②熊ヶ谷・

(本屋) 杉浦平左衛門

安房国…①名古・(本屋) 伊勢屋徳右衛門

上総国…①一ノ宮・奈良屋長兵衛、②勝浦・(本屋) 檜田

万藏、③木更津・(本屋) 鴻池七兵衛

下総国…①佐原・橋本 (本屋) 正文堂利兵衛、②多古・

(本屋) 土屋勘次郎、同・(本屋) 槌屋勘兵衛、

同・土屋久次(二)郎、③銚子荒野・(本屋) 飯

田屋利兵衛、④(太田)成田・日野屋治兵衛

常陸国…①鹿嶋・錢屋和三郎、②土浦・(本屋) 大國屋弥

助、同・橋本権七、③銚田・伊勢屋惣七、④水戸・

本丁七丁目 (本屋) 須原屋安次(二)郎、同・

上丁(本屋) 蠟燭屋六兵衛

東山道

近江国…①八幡前・納屋喜兵衛、②日野・大久保町 西村

市右衛門

上野国…①桐生・五丁目 石井五右衛門、②下仁田・(本屋)

桜井源五(吾) 左衛門、③高崎・あら町 (本屋)

沢本屋要藏

下野国…①安沢・嶋屋徳右衛門、同・(本屋) 万屋利兵衛、

②宇都宮・(本屋) 荒物屋伊右衛門、同・(本屋)

井桁屋理(利) 右衛門、③鹿沼・(本屋) 束原惣

兵衛、④黒羽・小西屋佐兵衛、⑤佐野・(本屋)

堀越常三郎、⑥栃木・仲町 (本屋) 釜屋喜兵衛、

同・(本屋) 枡屋浅吉、⑦日光(今市)・伊勢屋

久左衛門

信濃国…①飯田・(本屋) 十一屋半四郎、②稲荷山・荒町

(本屋) 和泉屋武右衛門、③上田・ふみ入 (本屋)

油屋金五郎、同・柳町 芦田屋佐久助、④小諸・

(本屋) 小山石藏、⑤諏訪・(本屋) 白木屋善右

衛門、⑥善光寺前・(本屋) 小枡屋喜太郎、同・

(本屋) 葛屋伴五郎、⑦高遠・(本屋) 藤屋八百

右衛門、⑧松本・(本屋) 高美屋甚左衛門、同・

(本屋) 藤松屋禎十郎

磐城国…①相馬中村・(本屋) 丁字屋与八、②相馬浪江・

大原次兵衛

岩代国…①二本松・(本屋) 枡屋惣右衛門、②福島・(本屋)

光白屋清二郎、③(会津)若松・一の町(本屋)
斎藤(屋)八四郎

陸前国…①仙台・国分町(本屋) 伊勢屋半右衛門、同・
大町三丁目 熊谷屋善兵衛

羽前国…①山形・十日町(薬屋) 大坂屋次右衛門
北陸道

加賀国…①金沢(本屋) 八尾屋喜兵衛

越後国…①三条(本屋) 扇屋七右衛門、②新発田(本屋)
新津屋太次兵衛、③水原(本屋) 小田島儀兵衛、
同・紅屋八右衛門、④長岡・鳥屋重右衛門

北海道

紀伊国…①熊野・宮前 角屋善藏、②若山・内大工町 玉
屋養藏

阿波国…①徳島・新町はし筋(本屋) 天満屋武兵衛

土佐国…①高知・種さき町 戸種屋只助

西海道

豊前国…①小倉(本屋) 中津屋卯助

結果をみると、丁字屋平兵衛が二十七国三十九個所五十八人、
河内屋茂兵衛が二十八国六十四個所百三十人であった。

三、薬取次との連携発端と波及効果

丁字屋平兵衛が、薬の販売に携わるようになるきっかけを
作ったのは、初代丁字屋平兵衛の養子となっていた二代目平兵
衛の実兄である千翁軒大坂屋半藏であったと思われる。大坂屋
半藏の本業は薬屋⁵⁾であり、文政二(一八一九)年に刊行された
『江戸買物独案内』をみると、以下のように、

本家 京蛸薬師通東洞院

調合所 通間軒桑村匡山製

蟻牛散 のぼせ引さけ

つんぼの薬

耳だれ耳がさ耳なりはれいたみのぼせ一切二よし

家伝 順補丸

一ひいのいたみよりおこる病症二よし 一ふく病二よし

一柔血不順によし 一りうだん二よし 一たんのいやし二
よし

出店 横山町二丁目

大坂屋半藏

と掲載されている。⁶⁾

やや後年の事例になつてしまふが、『馬琴日記』文政十一年十二月朔日条をみると、大坂屋半蔵方で販売する齒痛の薬を購入し、息子の宗伯へ服用させたところ、「夕方いたミ去、夜中熟睡」したので「妙薬也」と称賛している記事や、同書の天保二年九月三日条に「大坂や半蔵方へ順補丸かひニ遣ス、右薬、先月中今おさき服用之処、相応いたし候二付、宗伯等も可致服用ため也」との文言が記述されている。購入した「妙薬」が何の薬であったのかは、薬品名が未記載になつていて不明であるが、半蔵の店は、当時の江戸の人々にかなり名が知られた評判のよい薬屋の内の一店であつたらしい。

大坂屋半蔵が刊行を意図した理由は不明なのだが、「文政の初の比、半蔵石魂録前編の古板を贖得て、後編を刊行せまく欲りし、文政五六年の比より」作者の曲亭馬琴に同書後編の執筆を懇願する。だが馬琴は、「前編を綴りしより既に二十許年に及ひて、いたく流行に後れしものなれハ、作者のこゝろこゝにあらず」として必ずしも乗り気ではなかつた。しかし、再々懇願を繰り返す大坂屋半蔵の熱意に折れて執筆することを承諾し、文政十一（一八二八）年になつて『松浦佐用媛石魂録』の後編が刊行されることになる。⁹⁾

『松浦佐用媛石魂録後編』は、『馬琴日記』をみると「石魂録上帙売出し延引之由、兼而平兵衛引請、売候約束故也」と記されていて、大坂屋半蔵が板元で弟の丁字屋平兵衛が売弘人であつたことがわかる。馬琴は、「此板元素人故、自分にて売捌キ候事不叶、丁字やハ書林なれどもかし本問屋にて」といつて売捌き（販売）に懸念を示している。しかし、大坂屋半蔵と丁字屋平兵衛が出版するにあたつて、何の目算も立てないままで刊行したとは思えない。それでは同書の売弘め（販売）についてどんな方法を考えていたのであろうか。一つ目は、「引受人丁字や平兵衛大愆心にて、仲ヶ間うり正味十五匁二うり出し」とあるように、貸本屋仲間の世利市会で売り捌くという方法であつた。二つ目は、「大坂や半蔵願二付、よミ本交易被成候様いたし度旨、申之、河茂方へも大半同道、よミ本来春綴り遣し候つもり、江戸表一切之事、潤筆等之事も、大半引請、自分手板同様ニ可致旨、同人申之。依之、任其意、相談取極畢」とあり、大坂の本屋河内屋茂兵衛との間で交易（本替）を行うことで上方方面での引受人を確保し、刊行本の売弘め（販売）を確実にするという方法であつた。そして三つ目は、確認するための資料を見出すことができず推測の域を出ていないのだが、恐らくは、半蔵の抱えている薬の取次所をベースとして、刊行本

の売弘め（販売）を確実にするとともに、薬の取次所を増加させることで東国方面の販路を拡大させて行くという方法を構想していたのではなかったらうか。

文政初年の段階で、大坂屋半蔵・丁字屋平兵衛と河内屋茂兵衛との間に薬ないしは本の取次関係があったことが確認できないから、この段階で緊密な関係にあったとは考えにくい。従って両者の間をつなく仲介役が必要であった筈なのだが、そうした役割を果たしたのは誰であったのだろうか。大坂屋半蔵の本業が薬屋であったことを絡めて考えてみると、その人物は大坂の薬屋河内屋重太郎ではなかったかと思われる。奥付に文化三（一八〇六）年刊と記された『昔語 稲妻表紙卷之四』の巻末をみると、以下に記す効能書きが収載されている。参考のために、複数の取次人が記されている場合には、識別の便を考え（一）内に所在地が属する郡名を補記して郡名の五十音順に配列した。又、本を扱っていることが確認できた場合には、取次人名の後に（ ）内に本屋と補記した。

秘方　じゅんほ丸功能書　小半削入　代百二十四銅

（功能書文省略）

本家　江戸両国横山町二丁目　大坂屋半蔵印

京都売弘所　蛸薬師通東洞院東工入　大和屋彦右衛門印
大坂売弘所　心斎橋筋博労町　河内屋重太郎印

取次　諸　国　津　々　浦　々　に　御　座　候

江戸：三十軒堀五丁目　いせや喜平次、飯田町四番丁　植

木や半次郎、浅艸竹門　上総や清吉、四ツ谷竹丁

甲州屋助左衛門、神田さへ木丁　小山重兵衛、東小

松川推橋　駿河や文右衛門、三田有馬様前　すや小

左衛門、本郷四丁目　大和や八右衛門、千住二丁目

万や七兵衛

武蔵国：〔足立郡〕桶川五丁代村　□□東八、〔足立郡〕川

口宿　わたや忠兵衛、〔足立郡〕鳩ヶ谷裏寺　栄

久屋宗七、〔入間郡〕川越江戸町　麻や宇兵衛、〔埼

玉郡〕岩附□□□　小間物や富蔵、〔埼玉郡〕忍

館野村　栗原新六、〔埼玉郡〕小林村　高橋半内

相模国：厚木宿　大和や治兵衛

安房国：長須賀　榎本新右衛門

下総国：〔印旛郡〕佐倉横町　染木や彦兵衛、〔岡田郡〕飯

沼　升や栄助、〔葛飾郡〕栗橋宿　板屋庄七、〔葛

飾郡〕関宿若林村　釜や藤右衛門、〔香取郡〕佐

原仲宿　八代庄左衛門、〔香取郡〕なめ川　小川

や弥兵衛、〔相馬郡〕取手町 油や与兵衛、〔埴生郡〕寶田 粉や清兵衛

常陸国…□□幸田村 飯塚半次郎

上野国…桐生五丁目 本屋宗左衛門〔本屋〕、桐生新宿 大

沢嘉兵衛

下野国…〔足利郡〕足利元町 斎藤弥右衛門、〔那須郡〕烏

山かち町 伊勢や吉左衛門、〔那須郡〕せ戸村

亀や源吾、〔芳賀郡〕下もてぎ 柴や昇□、〔都賀

郡〕栃木町 毛塚喜右衛門

信濃国…小諸あら町 柳田五兵衛、同所 小山九郎兵衛 本

屋、御馬寄 大垣や万吉

岩代国…二本松竹田町 山崎や久兵衛

陸前国…仙台岩沼南町 村上屋幸助

越後国…高田 糸びすや嘉七

効能書きに印刷された年が明記されている訳ではないから、刊記に記された年代を鵜呑みにすることには危険があるが、『近世物之本江戸作者部類』に「庚寅の春正月、半蔵身故す¹⁶⁾」との記述があり、大坂屋半蔵が文政十三（一八三〇）年正月に死亡していることが確認できるので、遅くとも文化末年から文政初

年には大坂屋半蔵と河内屋重太郎の間で薬の取次関係が成立していたと考えてよいと思われる。そうであったと仮定すると、丁字屋平兵衛が文政二（一八一九）年に、河内屋重太郎が扱う三種の薬（「三国一風薬／家伝妙方」、「神仙広徳丸／日本一家万病」、「神遷神明湯／神功皇后御鏡袖薬」）の取次所¹⁷⁾になっていることが、河内屋茂兵衛への橋渡しを仲介してもらうことに對する見返り条件であったと理解できるのではないだろうか。

河内屋茂兵衛を抱えこむための見返り条件については、『馬琴日記』文政十二年八月十三日条に「大坂や半蔵江、去る六日、早状ヲ以、河内や茂兵衛方へ使客伝著述延引のわけ委細申遣候間、安心可致旨、申遣¹⁸⁾」という記載があることから考えても、大坂屋半蔵が馬琴に對して、茂兵衛のために作品を執筆することと、刊行にあたって板元になることの承諾を取り付けるための周旋を行うということであったと思われる。因みに、刊行された『松浦佐用媛石魂録後編』の奥付に、四種の薬（「神女湯／家伝」・「奇応丸／精製」・「黒丸子／熊胆」・「婦人つぎ虫の妙薬」）の効能書が収載されていて、そこには、

製薬 神田明神下同朋町東よこ丁 滝沢氏
弘所 元飯田町中坂下南側よもの向 たき沢氏

同取次所 横山丁二丁目

大坂屋半蔵

と記されていることから推測すると、大坂屋半蔵の店で滝沢家製の葉を扱うようにすることが、馬琴への見返り条件であったのかとも考えられるが、関係資料が見出せずよくわからなかった。

文政初年段階での河内屋重太郎と河内屋茂兵衛の関係については、茂兵衛が重太郎取扱葉「三国一風葉／家伝妙方」の取次所になっていることが知れる程度で、実態を把握することはできなかつた。しかし、①河内屋茂兵衛が文政元年に大坂本屋仲間に加した新興の本屋であつたこと。②文政六（一八二三）年に岡田玉山作の『阿也可之譚』、文政七（一八二四）年に十返舎一九作の『大念仏寺霊宝略伝連理雙袖』と狐郭亭主人作の『薄雲伝奇廓物語』という読本の求板刊行に関係していること。③文政十一（一八二八）年に十返舎一九作の読本『名勇発功談』の刊行に関わっていること。④本の製作面よりも売弘め（販売）面に比重を置いた商いを志向する本屋であつたこと。⑤上記した「三国一風葉／家伝妙方」の他にも、「玉置保赤円一名かぞのかんのくすり／小児主葉」、「留飲順胸散／たんしやくりういんのくすり」、「薬王丸／御免」、「蘇心丸／清客陸品三先生秘伝

方」の取次所になっていることが確認できること。などといった諸点を絡めて考えてみると、文政初年段階で河内屋茂兵衛が読本に大きな関心を寄せていたことは明らかである。曲亭馬琴という時流にあつた作者を得られる可能性があるとともに、大坂屋半蔵の取扱う葉「順補丸／家伝」の取次所を抱えこむことで、今まで手薄であつたろう東国主要地に確実な売弘め（販売）拠点を作り出すことにもつながって行く筈で、取扱本の販路拡大を本屋稼業を発展させる柱と考へていたらしい河内屋茂兵衛にとつて、きわめてメリットのある申し出であつたのではなかつたらうか。

おわりに

その後も丁字屋平兵衛と河内屋茂兵衛は、『本朝悪狐伝前編』（文政十二年刊）、『本朝悪狐伝後編』（文政十三年刊）、『復仇越女伝後編』（天保四年刊）、『絵本和田軍記』（天保五年刊）、『復讐野路の玉川』（天保七年刊）、『鎮西菊池軍記』（天保十二年刊）などといった読本の刊行・売弘め（販売）に力を入れている。扱ひ葉の取次所の抱え込み活動にも努めていたようで、河内屋茂兵衛は、刊年不明ながら文政末年から天保初年頃と考えられ

る、『木曾街道続膝栗毛』の巻末広告をみると、

玉置保赤円一名かぞのかんのくすり／小児主薬
御免製薬所 小兒科 武州埼玉郡加須町 大和氏門司法橋
精製

上方元弘所 書物店 大坂心齋橋筋博労町 河内屋茂兵衛

大坂並近在取次所

大坂：北久宝寺町難波橋東へ入 和泉屋作兵衛、日本
ばし南詰東へ入 (本屋) 井筒屋治兵衛、南本
町難波橋西へ入 扇屋五郎兵衛、南久宝寺町壺
丁目筋北へ入 (本屋) 河内屋喜兵衛、心齋橋
筋本町南へ入 (本屋) 河内屋新助、善町安堂
寺町北へ入 菊屋武右衛門、天満うら門橋西詰
西へ入 五箇屋万吉、堂島わたなべ橋北詰北へ
入 境屋治三良、堺筋清水町南へ入 (本屋)
正本屋利助、南草屋町 炭屋治兵衛、西横堀備
後町北へ入 富田屋平兵衛、八軒家船乗場 中
嶋屋藤助、堀江下博労わたら場東へ入 能登屋
佐助、嶋之内丸大向イ (本屋) 長門屋兵助、

天満十丁目鳥居筋北へ入 奈良屋安治良、なん
ば新地又相生町半鐘之下 播磨屋喜六、嶋之内
三津寺筋わたや町北へ入 (筆屋) 播磨屋吉右
衛門、松屋町通本町角 平野屋甚右衛門、日本
ばし南五丁目 広嶋屋伊兵衛、平野町御堂筋南
へ入 藤屋佐兵衛、高麗橋壺丁目 (本屋) 藤
屋善七、農人橋壺丁目 (本屋) 本屋吉兵衛、
高麗ばし心齋橋筋角 松本屋清兵衛、新町通筋
道若狭町西へ入 (本屋) 松屋喜兵衛、松や町
通大手筋北へ入 山城屋卯兵衛、松や町通南久
宝寺町北へ入 (本屋) 大和屋嘉兵衛、松屋町
二ツ井戸南へ入 (紙屋) 大和屋治兵衛、北ほ
り江市のかハ (本屋) わたや喜兵衛
摂津国：尼崎築地宮本町 鯛屋弥兵衛、灘みかげ 大
和屋与市郎、兵庫嶋上町 □□屋吉兵衛
播磨国：明石東樽や町 わさびや伊右衛門
大坂に二十八店、尼崎・灘・兵庫・明石に各一店の取次所が掲
載されており、さらに末部に「○尚此外諸国在々町々津々浦々
に取次所在之」とあって、具体的にはわからないが他地域にも

取次所があったことが記されている。丁字屋平兵衛の場合は、関連資料を見付けられず明確にすることはできなかった。しかし、大坂屋半藏死後も扱ひ葉「順補丸／家伝」の取次所との關係を維持することに努めていたと考えるのが自然であろうから、文政末年から天保初年頃の時期には、そこに記されている江戸：九店、江戸を除く武蔵国（岩槻・桶川・忍・川口・川越・小林村・鳩ヶ谷）：七店、相模国（厚木）：一店、安房国（長須賀）：一店、下総国（飯沼・栗橋・佐倉・佐原・関宿若林村・寶田・取手・滑川）：八店、常陸国（幸田村）：一店、上野国（桐生）：二店、下野国（足利・烏山・瀬戸村・栃木・茂木）：五店、信濃国（御馬寄・小諸）：三店、岩代国（二本松）：一店、陸前国（岩沼）：一店、越後国（高田）：一店を取次所として抱え込んでいたと考えてよいと思われる。

『馬琴日記』天保五（一八三四）年八月八日の条をみると、「売葉并ニ書物類注文申越し候」とあり、馬琴の許へ面識のない淡路国須本在住の町人である津国や関右衛門が、江戸小あみ丁一丁めでかつをぶしやを営んでいるいせや新七を介して、売葉と本を注文する手紙を送付していたことが知れる。津国やの本業が何であるのか、彼が馬琴に対して直接注文するに至った経緯などについては、関連する資料がなくよくわからなかった。し

かし、本をみて興味・関心を持った上でなされた行為であったことは間違いない所であろう。このことからみても、本に掲載することによる広告効果はかなり高く、特に地方では情報が少なかった分だけより有効であったことがわかる。馬琴は津国やのなした行為を、「此方、葉ハ渡世不致候間、わたしうりせず、況、本やにあらねバ、書籍などの注文、取引すべくもあらず」として、「田舎ものにて、此方之様子一向不存、尤非礼の文通⁽²⁾」⁽²⁾と書いて一笑に付している。しかし、本屋が存在していない地方では、作者に直接注文した例はさすがに少なかったろうが、本に掲載されていれば本屋と葉屋を厳密に区別して考える人はそう多くはなかった筈である。従って、居住地の近辺に本屋が存在していない地方では、取次所になっている葉屋の名が記載されていれば、当然近在地の葉屋に声掛けをしたのではなかったろうか。そうした推測があたっているとすれば、本の広域流通を押し進めるためには、販売拠点を増加させることが最も効果的な方法であったといえるのだろう。「物之本」は、重刻の可能性が少なからずあり永続的な販売が見込める商品であったが、読本や合巻本などといった「草紙本」は、重刻の可能性の薄い一過性の要素が強い商品であったから、ブーム現象が継続している期間に売り切ってしまうことが求められた。そ

の故もあって、丁字屋平兵衛も河内屋茂兵衛も売弘め（販売）拠点を増加させることに力を注いでいたのであろう。薬屋は、早い時期から独自の広域流通組織を形成し、地方へも積極的進出していったから、すでに形成されていた取次所を取次拠点として抱え込むことは、本の広域流通を押し進めて行くことにつながったと考えてよいと思われる。

本稿は、推論部分が多くやや具体性に欠ける論文となつてしまっているが、本屋が薬の取次所になる例が多かったこととその理由についてある程度明らかにし得たのではないかと思つている。しかし、薬の取次所が本の取次にどのように関わったのかという肝心な具体的な部分については、明らかにし得ていないことを自覚している。この問題については、資料が僅少であり明確にすることはなかなか困難であるが、今後の課題として考えて行くことにしたい。

また、本稿では薬の取次に絞って論述してきたが、取次拠点を増加させることが取り込む理由であったとするならば、薬屋に限ることはなかったということになる。従つて、江戸期に本屋が扱うケースの多かった、紙、筆、墨、絵具などといった文房具類、千代紙、紙入れ、傘、つや布巾などといった紙を加工した小間物類、煙草入、煙管、扇子、簪などといった品を扱う

店も、同様に本の広域流通拠点に成り得た訳だから、そうした視点からも一考してみたいと思つている。

注

- (1) 須原屋茂兵衛の取扱薬として、「順気散／家伝」、「人參長寿丹」（天保十一年刊『和漢年歴箋』巻末広告所収）、「痰毒一方丸／家伝」、「紫金錠」（刊年不明、鈴木俊幸「須原屋茂兵衛の薬商売―引札と薬書」『書物学』11）、「勉誠出版、二〇一八年、一九―二〇頁所収引札）、「唐線香」、「丸散丹」（刊年不明、架藏引札所収）が確認できる。
- (2) 鶴屋喜右衛門の取扱薬として、「仙女香／美艶／御顔のくすり」、「美玄香／黒油／しらが染くすり」、「靈応丹／蘭伝」（文政十二年刊『傾城水滸伝第六編二』巻末広告所収）、「鶴聲丹」、「成駒香」（天保二年刊『あなかり源氏四編』奥付広告所収）、「錦囊壯勢丹」（天保五年刊『菜種黄表紙』巻末広告所収）、「龍王調血湯／家秘密方」刊年不明、（東京都立中央図書館『江戸時代完売広告引札貼込帖 復刻版』フジミ書房、二〇〇六年、二六―二八頁所収引札）が確認できる。
- (3) 河内屋太助の取扱薬として、「水晶粉／十三味薬洗粉」、「読書丸／加減」（文化十年刊『双蝶記巻之六』巻末広告所収）、「薄化粧／御顔の薬洗粉白粉」、「江戸の水／おしろいのよくなるおかほのくすり」、「金勢丸／秘方」、「毛はえくすり」、「玄妙散／しやくの黒薬」、「小児百日せきの奇薬」、「仙女香／美艶／御顔のくすり」、「天女丸／秘方」、「蘭奢袋／御にはびくろ」、「龍樹散／御目あらひ薬」（文化十四年刊『艶容歌妓結中編』巻末広告所収）、「奇応丸／精製」神女湯／家伝」婦人つきむしの妙薬」（文化十四年刊『朝夷巡鳴記全伝第二編巻五』巻末

- 廣告所収、「黒丸子／熊胆」(文政三年刊『南総里見八犬伝第四輯』巻末広告所収)、「御はみがき／箱入」(東京都立中央図書館『江戸時代完業広告引札貼込帖 復刻版』フジミ書房、二〇〇六年、一三八頁所取引札)が確認できる。
- (4) 調査にあたっては、主として、井上隆明『改訂増補近世書林板元總覧』日本書誌学大系七十六、中央公論社、一九九八年、鈴木俊幸編・刊『近世日本における書籍・摺物の流通と享受についての研究』書籍流通末端業者の網羅的調査を中心に「一九九六―一九九八年度科学研究費補助金(基礎研究C)」、研究成果報告書、一九九九年、大和博幸「江戸後期・明治初年の地方出版業者―文政元年から明治五年まで―」(國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要)二号、二〇一〇年などを参照した。
- (5) 江戸期に大坂屋半蔵が商っていたことが確認できた葉は、「蟻牛散」、「順補丸／家伝」(文政七年刊『江戸買物独案内』所収)、「奇応丸／精製(極品)」、「黒丸子／熊胆」、「神女湯／家伝」、「婦人つき虫の妙薬」(文政十一年刊『松浦佐用媛石魂録(後編)』巻末広告所収)、「解毒養童丸」(架藏引札所収)の七種である。しかし、「馬琴日記第二巻」を見ると「よこ山町大坂や半蔵方へ、口中散かひ取二遣ス」(文政十二年六月十四日、四五八頁)と記されており、取扱っていた薬は他にもあったと思われる。
- (6) 花咲一男編『江戸買物独案内』渡辺書店、一九七二年、二〇六頁。
- (7) 暉峻康隆他編『馬琴日記第一巻』中央公論社、一九七三年、四五六頁。
- (8) 前掲『馬琴日記第二巻』一五九頁。
- (9) 木村三四吾編『近世物之本江戸作者部類』八木書店、一九八八年、一九八頁。
- (10) 企画段階から刊行に至るまでの経緯については、高木元『江戸読本の研究―十九世紀小説様式攷』ペリかん社、一九九五年、鈴木重三・徳田武編『馬琴中編読本集成第十巻解題』汲古書院、一九九九年、徳田武『馬琴京伝中編読本解題』勉誠出版、二〇一二年などに詳述されている。
- (11) 前掲『馬琴日記第一巻』文政十一年三月十一日条、二八二頁。
- (12) (13) 前掲『江戸読本の研究―十九世紀小説様式攷』三三〇頁。
- (14) 前掲『馬琴日記第一巻』文政十一年十月四日条、四二二―四一三頁。効能書に取載されている取次所は順不同の書き方になっているが、読者の便を考え、同一国に複数の取次所が存在する場合には、同一国・同一郡にまとめ再整理した形で記載した。尚、現物の摺りの状態がきわめて悪く、判読できない箇所が多く出てしまい判読不能字については□と表記せざるを得なかった。そうした事情もあり判読間違いも少なくないと思われるので、識者のご教示をお願いしたい。
- (16) 前掲『近世物之本江戸作者部類』二〇三頁。
- (17) 上記「丁字屋平兵衛の取扱葉」あ・い・うを参照のこと。
- (18) 前掲『馬琴日記第二巻』一四四頁。
- (19) 上記「河内屋茂兵衛の取扱葉」ホを参照のこと。
- (20) 出勤帳第三十三番に「九月廿日、定日寄合 一河内屋儀助召仕別家加入 河内屋茂兵衛 右加入申出候二付出金請取、諸帳面印形為致候事、但し文政元年先行司之付落也」と記載されている(大阪府立中之島図書館蔵、刊『大坂本屋仲間記録 第三巻』一九七七年、二七〇頁)。
- (21) 河内屋茂兵衛について、項目執筆者の浜田啓介氏が「曲亭馬琴の長編読本『開巻驚奇侠客伝』の板元。しかし本書を例外として、自ら開版することは殆どなく、他店所持の板株、特に京都・江戸ものを多数買付けすることによって店勢を拡張し、幕末期大阪における最大の板株所有者となった。かかる営業方向は当時の大阪書林の一風潮であったが、河茂はその代表的存在である」と書かれている。(井上宗雄等編『日本古典籍書誌学辞典』岩波書店、一九九九年、一二五―一二六頁)

(22) 前掲 『馬琴日記第四卷』 一七八頁。
(23) 前掲 『馬琴日記第四卷』 一七七頁。